

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
527	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
The Alcohol Use Disorders Identification Test (AUDIT) and its derivatives in screening for heavy drinking among the elderly. 飲酒関連疾患同定検査(AUDIT)およびその派生検査法を用いての高齢者における多量飲酒スクリーニング	
執筆者	
Mauri Aalto, Hannu Alho, Jukka T. Halme, Kaija Seppä	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Int J Geriatr Psychiatry 2011; 26: 881-885.	
キーワード	
飲酒診断、深酒、時系列遡及、調査票	
<b>要 旨</b>	
<b>目的：</b> 高齢者における多量飲酒スクリーニングに対して飲酒関連疾患同定検査(AUDIT) の能力は不十分であった。本研究の目的は閾値を修復することによって AUDIT とその派生検査法が高齢者における診断応力を改善できるか否かについて検討することにある。	
<b>方法：</b> 層別無作為抽出した 65-74 歳のフィンランド人 804 人の内 517 人(64.3%)が AUDIT 検査を行い、飲酒量に関する時系列遡及対面調査 (TLFB)を受けた。週間平均飲酒量が 8 飲酒単位 (1 日平均エタノール 12 g)、あるいは 28 日間に少なくとも 1 日 4 飲酒単位を飲めば大量飲酒者とした。感受性と特異性がともに 0.8 あれば至適とした。高齢者用の AUDIT-3 での深酒の閾値は 4 飲酒単位である。	
<b>結果：</b> 時系列遡及対面調査によると 118 人 (22.8%)が大量飲酒者であった。ROC 曲線下面積は全質問肢で同等 ( $\geq 0.898$ ) であった。AUDIT の通常閾値の 8 飲酒単位を用いると感受性は 0.48 となった。閾値を 5 飲酒単位に下げると感受性と特異性がともに 0.85 以上になった。飲酒量に関して問う最初の 3 質問肢の AUDIT-C の至適閾値は 4 飲酒単位であった。飲酒量と頻度を聞く AUDITQF、深酒についてのみ聞く第 3 質問肢 AUDIT-3 と高齢者用 AUDIT-3 はどんな閾値を用いても至適な感受性と特異性の組み合わせが得られなかった。	
<b>結論：</b> 閾値を変更した AUDIT と AUDIT-C を用いることによって高齢者における多量飲酒スクリーニングを正確に実施することが出来た。	